

知求会ニュース

2007年04月

第21号

◎ 修了おめでとうございます！

2007年3月23日金曜日午後1時10分から国際学部A棟4階大会議室にて、2006年度学位記手渡し式が開催されました。

今年度の修了生は、国際社会研究専攻 木舟雄亮さん、岡本義輝さん、高井孝美さん、五十嵐章太さん、邢 鵬さん、朱 燁丹さん、高橋明弓さん、津金麻希子さん、山村祥代さん、楊 劍さん、李 瑩さん、呂 洋さんの12名と国際文化研究専攻 江川純子さん、飯 正則さん、呉哈吧粒さん、平井礁子さん、フロレス フロレス イルマ ルイサさん、宮本玲子さん、洪 賢善さんの7名、そして、国際交流研究専攻の第2期生 今井淳雄さん、佐藤暁人さん、ステーシー ウルドン ニギラルマウさん、張 暁東さん、張 輝さん、田 景花さん、方 小贇さん、檜浦里佳子さんの8名で、計27名でした。

今年度の修了生の主な進路は進学3名、団体職員2名、広告代理業1名などです。記念撮影の写真は、みなくるねっと(<http://www.minakuru.net>)のアルバムで見られます。

昨年度より、学業優秀者に贈られる**宇都宮大学奨学金(奨励賞)**に、国際学研究科の1名として**方 小贇**(国際交流研究専攻)さんが受賞されました。

◎ 進学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程に入学する**坂本文子**(国際社会研究専攻・第5期生)さん、**岡本義輝**(国際社会研究専攻・第6期生)さん、**宮本玲子**(国際文化研究専攻・第7期生)さん、**方 小贇**(国際交流研究専攻・第2期生)さん 進学おめでとうございます。

◎ 北島 滋国際学研究科長・国際学部長再選

北島 滋先生が4月1日から任期2年間で再選されました。詳細は掲載記事紹介9を参照して下さい。

◎ 教職員人事異動

小池清治教授

国際文化交流研究講座所属の小池先生が3月31日付で定年退職されました。先生は教養学部時代から在籍されており、国際学部開設から12年余、国際学研究科開設から8年間お世話になりました。次号の研究室訪問13コーナーで、先生の研究について掲載します。

中戸祐夫助教授

地球社会形成研究講座所属の中戸先生が3月31日付で退職され、母校の京都・立命館大学国際関係学部に転出されました。先生には国際学部と国際学研究科ともに6年間お世話になりました。新たな関西の拠点で益々の研究成果を实らせていただきたいと思います。

青木芳哲総務係長

国際学部事務部総務係長の青木芳哲さんが4月1日付で学生支援課に人事異動されまし

た。係長は国際学部には2年間在籍されていました。裏方として国際学研究科・国際学部の事務を円滑に、かつ前進的に采配されてこられました。在籍期間中は本当にお疲れ様でした。後任には、人事課から小川由美子係長が着任されました。

◎ 着任教員紹介その7

高山道代 (TAKAYAMA Michiyo)

専門：日本語学

前職：大学講師

趣味：読書、散歩など

自己紹介：

四月から赴任させていただくことになりました高山道代です。「日本語論」「日本語表記論」などの授業を担当させていただくことになりました。これまでは平安期の日本語について、特に名詞の用法について文献調査をもとに形態論の立場から研究してきました。現代の日本語では主語も対象語もどちらも「が」「を」などの助辞をつけて表現しますが、平安期の日本語では主語も対象語も助辞をくっけず名詞だけで表現する場合があります。このような形態上の変化はどのような必然性によって生じてきたものなのか、文献調査をとおして歴史的に位置づけていくのが目下の課題です。子どものころから歌をよむのが好きでしたが、万葉集のことばにひかれたのが研究をはじめのきっかけだったように思います。昨年秋、宇都宮にさしかかったあたりで車窓から夕日をうける大木がみえました。宇都宮の町をあるいて小さな発見をするのが今から楽しみです。

◎ 2月入試合格結果

国際社会研究専攻	一般	5名	・	社会人	2名	・	外国人留学生	2名	計7名
国際文化研究専攻	一般	1名	・	社会人	2名	・	外国人留学生	1名	計4名
国際交流研究専攻	一般	4名	・	社会人	0名	・	外国人留学生	0名	
				国際交流・国際貢献活動経験者	3名		計7名	合計	18名

◎ テレビ放映案内

本年2月3月に教育テレビにてNHK知るを楽しむこの人この世界に、非常勤講師 石澤良昭先生が「アンコール遺跡・残された歴史のメッセージ」のタイトルで8回に分けて出演されました。

- 第1回(2月05日放映) アンコール遺跡との出会い
- 第2回(2月12日放映) アンコール・ワット 天空の宮殿
- 第3回(2月19日放映) アンコール文明は1日にして成らず
- 第4回(2月26日放映) アンコール・トム 混沌に秘められた謎
- 第5回(3月05日放映) 二七四体の廃仏発見
- 第6回(3月12日放映) アンコール遺跡の「発見者」たち
- 第7回(3月19日放映) まだ眠る未踏の遺跡
- 第8回(3月26日放映) 遺跡を守る

◎ 新刊案内

昨年 7 月に、**若山俊介** 先生が長年のドイツ文化研究の成果である『**ドイツ・ロックの世界**』（春風社）という単著を刊行されました。詳細は、次のアドレスで紹介されています。

<http://shumpu.com/rsd.php?itemid=1337> <http://www.bk1.co.jp/product/02685591>

◎ 放送大学栃木学習センター主催公開講座「栃木の自然と人文」

本年 3 月 11 日に、栃木県総合文化センターで開催された公開講座に**北島 滋** 先生「栃木の地域性について考える」と**高際澄雄** 先生「田中正造に学ぶ」と題した講演がありました。詳細は、放送大学栃木学習センター広報誌「とちの実」第 55 号 8 頁をご覧ください。

◎ 掲載記事紹介

1. 政府開発援助 ODA の HP に、国際社会研究専攻第 3 期修了生 **日下共司** さんの 2 つの記事が紹介されました。詳細は、平成 18 年度 あなたの目でみる国造りの現場 ODA 民間モニター報告書 第 II 期派遣 中華人民共和国 ①各モニターの全体報告 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/kaikaku/monitor/18m_hokoku/china/opinion/inspect.html) ② 視察内容および各モニターの個別案件毎の報告 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/kaikaku/monitor/18m_hokoku/china/opinion/opinion_1.html) をご覧ください。

2. 下野新聞 平成 18 年 12 月 3 日(日)に、「不就学 大変なことに」外国人教育めぐりシンポと題した**田巻松雄** 先生代表の記事が掲載されました。

3. 下野新聞 平成 18 年 12 月 10 日(日)に、知事 3 年目首長の期待「真価問われる任期後半」と題した記事に**中村祐司** 先生のコメントが掲載されました。

4. 下野新聞 平成 18 年 12 月 15 日(金)に、「平和憲法を守ろう」と題した**杉原弘修** 先生の講演紹介記事が掲載されました。

5. 下野新聞 平成 18 年 12 月 18 日(月)に、私の下野新聞批評「生活者の視点 明確な論説」、同紙平成 19 年 1 月 22 日(月)に、私の下野新聞批評「県内のいじめ探る企画を」と題した**阪本公美子** 先生の記事が掲載されました。

6. 下野新聞 平成 18 年 12 月 26 日(火)に、「防犯カメラ運用に制限」宇都宮市が要領策定へと題した市個人情報保護運営審議会会長・**杉原弘修** 先生の記事が掲載されました。

7. 下野新聞 平成 19 年 1 月 15 日(月)に、益子で県民協働討論会「森づくり事例を報告」と題した**高橋若菜** 先生の記事が掲載されました。

8. 下野新聞 平成 19 年 1 月 22 日(月)に、話題人「国境越えた市民活動学ぶ」と題した**北島 滋** 先生の記事が掲載されました。

9. 読売新聞と下野新聞 平成 19 年 1 月 25 日(木)に、学部長選挙「国際学部は続投」と題した**北島 滋** 先生の記事が掲載されました。

10. 下野新聞 平成 19 年 2 月 4 日(日)に、宇大生にアンケート「今どきの若者 格差に不安感」と題した**杉原弘修** 先生の記事が掲載されました。

11. 下野新聞 平成 19 年 2 月 4 日(日)に、宇都宮で格差是正フォーラム「子供の希望にも

格差」と題した杉原弘修先生の記事が掲載されました。

◎ 宇都宮大学各学部等同窓会連絡協議会報告

平成18年度第四回の会合が、2月17日(土)午後3時から宇都宮大学第2会議室で開催されました。出席者は菅野長右エ門 学長・水本忠武 理事・海野 孝 理事・西田 靖 理事・村松君雄 理事・友松篤信 学長特別補佐の大学側6名と事務局担当者5名、岡本英子 国際学部同窓会副会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・落合信夫 工学部同窓会会長・安達久博 同副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長・笠原義人 同副会長・松澤康男 同理事長の同窓会側10名でした。議事内容は、検討事項として、1. 宇都宮大学博物館のグランドデザイン(案)について 2. その他や各同窓会からの活動報告・要望等、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 国際学部だより

1. シンポジウム報告

田巻研究室の大学院博士前期課程進学者・遠藤 歩さんによる寄稿をお願いしました。

昨年12月2日に宇都宮大学峰キャンパスで開催されたシンポジウム、「栃木県における外国人児童生徒の教育の明日を考える2006」に参加しました。近年の外国人流入に伴い、かれらに関する報道をテレビや新聞等で目にする機会も増えてきましたが、その中でも私は外国人の子どもの教育問題に関心があり、このシンポジウムに参加できることを楽しみにしていました。

当日は外国人児童生徒教育に携わる方々や学生が参加する中、太田市教育委員会学校指導課から「太田市における外国人児童生徒教育への取組み」、外国人児童生徒を担当する中学校教諭から「外国人児童生徒教育の現状」、本学大学院生から「在日ペルー人の家庭環境とコミュニケーションをめぐる問題」という三者の報告と、小山市教育委員会学校教育課の方、小学校の日本語指導員、ブラジリアンスクールの校長をパネリストに迎えてのパネルディスカッションが行われました。教員が学校現場で抱えている深刻な状況や地方行政の問題改善に向けての取組みに関して、その後の質疑応答では参加者から数々の質問や意見が出ました。そのなかで最も印象に残っている質問は、外国人児童生徒を担当している教員に対する「学生は今、何か協力できることはあるのですか」というものでした。私は外国人児童生徒教育の抱える問題の改善策を模索、研究をしたいと思う一方で、現実に今自分は何をすべきか、または何ができるかということが全く見えていませんでした。質問に対する先生の回答は「若い人は大きなことを考えがちだが…。(中略)1人に関わりそれで何かを感じる、それで十分ではないか。」というようなものでした。外国人児童生徒の教育環境改善にはどうすればよいのかということを見ず、外国人の子どもとのふれあいや交流もなく語ろうとしていたことにこの時気づきました。

今回のシンポジウムに参加したことで有意義な時間を過ごすことができたと同時に、自

分はまだこの問題に関して知識も浅く、現場の状況を見ずに語ろうとしていたことなど反省しなければならないことも多かったです。しかし、この場に参加できたことが今後も外国人児童生徒の教育環境改善に関わり続けていきたいという強い思いに繋がりました。そして今回のような試みは、参加した学生や現場の教員、地域社会に現状を発信し共に考えるという意味でとても貴重な場となったと思います。日本社会では今後も更なる外国人の増加が予想され、かれらとの共生は必然となるのでしょうか。これからも意見交換や情報発信の場としてシンポジウム等の機会を継続させていけたらと思います。

2. 掲載記事紹介

産経新聞 平成 18 年 12 月 7 日(木)に、**若山俊介**先生らの宇大でベストティーチャー賞紹介記事「5 教員の“腕前” 拝見」が掲載されました。

下野新聞 平成 18 年 12 月 9 日(土)に、「ネパールの現状体験基に講演」と題した**シャプラニール=市民による海外協力の会**主催で小松豊明さんの記事が掲載されました。

下野新聞 平成 18 年 12 月 15 日(金)に、年の瀬この人は「宇大出身のロックバンド キャプテン ストライダム 凱旋ライブ成功に感激」と題した国際学部出身の**梅田啓介**さんらの記事が掲載されました。

下野新聞 平成 19 年 1 月 11 日(木)に、若者感覚で国際協力を「13 団体が活動紹介 シンポ開き体験報告も」と題した栃木インターナショナル・アクト代表・**荻野綾子**さんらのフォーラム紹介記事が掲載されました。

朝日新聞 平成 19 年 1 月 25 日(木)に、「マイ・エコバックみんなで作ろう」と題した国際学部 1 年の **TEAM★エコ隊**の**佐々木友美子**さんと**中野 結**さんらの記事が掲載されました。

朝日新聞 平成 19 年 1 月 31 日(水)に、「国際協力の紹介 学生たちが企画」と題した**栃木インターナショナル・アクト**の記事が掲載されました。

読売新聞 平成 19 年 2 月 4 日(日)に、「国際協力呼びかけ 手作りイベント」と題した**栃木インターナショナル・アクト**の記事が掲載されました。

下野新聞 平成 19 年 2 月 9 日(金)に、宇都宮大でフォーラム「人のつながり大切に」学生ら国際協力を模索と題した**栃木インターナショナル・アクト**の記事が掲載されました。

下野新聞 平成 19 年 2 月 11 日(日)に、物産を輸入販売 生活向上後押し「途上国支援へカフェ開店」と題した**リソース・ネットワーク**の記事が掲載されました。

研究室訪問 12 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 12 回目には、地域社会形成研究講座所属の阪本公美子先生にお願いしました。

「人間開発からアフリカ・モラル・エコノミーまで」

阪本公美子

宇都宮大学国際学研究科の大学院で教え始めて3年経ち、授業の中で私の研究課題が滲みでることはあるものの、まとめて紹介する機会はなかなかない。改めてこの

機会に、これまでの私の研究課題の変遷を3つの期に分けて紹介したい。なお、関連する代表的な著作等を注に記載するので、参照頂けると幸いである。

1. 「人間開発」と「貧困」期

学部で南北問題について感心を持ち始め、卒業論文では援助について取り上げた。修士では、これまでの経済開発を主流と捉える考えのアンチテーゼとして、1990年代以降、国連開発計画(UNDP)の人間開発報告をきっかけに注目されるようになった「人間開発(human development)」を論文のテーマとした。論文では、その人間開発の理論を、経済学説史的な位置づけをした上で、近年の理論展開への系譜を整理し、日本の「人づくり」政策を人間開発の理論で吟味した。人間開発は、人間を手段としての労働力とみなす人的資源開発とは異なり、人間の「生」そのものを目的とする考え方を含む。論文の中では、日本の「人づくり」政策が、人的資源開発としては評価できるが、人間開発の視点からは限界があったことを明らかにした。¹

修士課程の研究では、「自分が何をすべきか」を探すことも目的と位置づけており、このプロセスで人間開発に関連した国際協力機関に身を置きたいと決めた。JPO (Junior Professional Officer)候補となった時も、人間開発と関連する機関でもある国連児童基金(UNICEF)と国連開発計画を希望した。前者にはJPOとして主にコミュニティ・モニタリングに、後者には専門家として貧困モニタリングに携わり、ともにタンザニアにて計5年余り勤務した。この時期は、理論で学んできた人間開発の現場を経験できただけでなく、日常的にアフリカの都市に生活し、時に実際のプロジェクト等が存在する地方にも赴くという貴重な時期であった。

2. 「開発と文化」期

しかし、まさに理論上すべきと私が考えていた仕事に実際ついてみると、「開発」そして「人間開発」が、人びとの文化とどのように関係するのか気になり始めるようになった。国連開発計画で貧困モニタリングの仕事をしていた際、地方のエリートの「慣習的な文化が開発を阻害している」という主張をしばしば聞いたが、その裏にはどのような構造があるのか。また、ユニセフの調査では、女性と子どもの福祉を害する「伝統的慣習」が例示されているが、どのような背景に基づくものなのか。「開発」が前提とするさまざまな約束事は、普通の人びとの考えとも一致しているのかなど、一連の知的好奇心と「開発」そのものに対する懐疑心が芽生え、「開発」の現場から一歩身を引いて、開発と文化の関係を普通の人びとのコンテキストで再考察したいと考えるようになった。

以上のような問題関心を持ち博士課程に入った。博士論文では、開発と文化に関する理論的整理、タンザニアにおいて文化が形成される地理的・歴史的コンテキスト、政策と社会開発と比較した統計的データ分析、タンザニア南東部における人びとの開発と文化に関する意識調査の結果を核とした。大筋においては、開発が必ずしも文化を考慮してこなかったがために、開発と文化が対立することを明らかにし、開発と文化が調和しうる内発的発展の条件を導き出した²。それと同時に、文化を議論する時、ジェンダーと世代によってかなりの差異があり、内発性を議論するにあ

¹ 阪本公美子(1997)「人間開発と社会開発」西川潤編『社会開発—経済成長から人間中心発展へ』有斐閣、第6章、pp.113-136は、修士論文を要約した形で収録した。

² Sakamoto, Kumiko (2003) *Social Development, Culture, and Participation: Toward theorizing endogenous development in Tanzania*, 早稲田大学アジア太平洋研究科博士論文

たっても、一枚岩ではないことを強調してきた³。また、「貧困」が文化に起因するのではなく、歴史的に周辺化されることによって作られてきた側面も指摘した⁴。

3. 「アフリカ・モラル・エコノミーと内発的発展」期

開発と文化とも関連してくるが、博士論文提出後、最も熱心に深めてきた研究は、アフリカ・モラル・エコノミーの研究である。これまでアフリカの貧困や経済停滞を、近代化論は後れと見なし、従属論は外部による構造的要因と説明してきたが、アフリカ・モラル・エコノミー研究会では、赤道アフリカ社会内部の要因に焦点を当てた共同研究を重ねている。本研究会は国内外で評価されており、国際的な学術会議における発表が奨励され、アフリカ学会の学術雑誌『アフリカ研究』でも本年度特集が組まれる予定である。その中で私は主にアフリカ・モラル・エコノミーと内発的発展を繋ぐ役割を担っており、いくつかの視点から論考を試みた。アフリカ・モラル・エコノミーの特徴としてはインフォーマルな組織による再生産活動の重視が挙げられるが、これまで停滞原因として議論されてきたこれらの特質は、発想の転換によって内発的発展の可能性も見出せることを主張してきた⁵。

4. 今後の課題

これまで「人間開発」と「貧困」、「開発と文化」、「アフリカ・モラル・エコノミーと内発的発展」と、様々な形で従来の「開発」のあり方を問い直してきた。今後もこれまでの研究を継承しつつ、研究を深めるとともに広い視野も持ち、新たな展開を模索している⁶。更に、研究内容と連動して自らの生活を問い直すことをはじめとして、よりよい社会の形成に寄与してゆきたい。

³ 阪本公美子 (2005) 「開発と文化の調和对立—タンザニア南東部における地域・ジェンダー・世代—」『宇都宮大学国際学部研究論集』、第 20 号、pp.15-28

⁴ 阪本公美子 (2004) 「タンザニアにおける「貧困」の歴史的形成—スワヒリ文化に対する潜在的偏見を超えて—」『混迷する国際社会と共生へのビジョン』、pp.115-136

⁵ Sakamoto, Kumiko (2005) “Endogenous Development and Moral Economy in Africa: In relation to subsistence and democracy”, paper prepared for the PEKEA (Political Ethical Knowledge on Economic Activities) IVth International Conference on Democracy and Economy, Rennes. (<http://fr.pekea-fr.org/Rennes/T-Sakamoto.doc>)

阪本公美子 (2006) 「赤道アフリカにおける小農のモラル・エコノミーに基づく内発的発展の可能性と課題」『宇都宮大学国際学部研究論集』第21号、pp.19-27

阪本公美子 (2007) 「東アフリカの内発的発展」西川潤・八木尚志・清水克巳編『社会科学を再構築する—地域平和と内発的発展』明石書店

⁶ Sakamoto, Kumiko (2006) “Women and men in changing societies: Gender division of labor in rural southeast Tanzania”, Paper prepared for the PEKEA International Conference, Dakar, Senegal で(<http://fr.pekea-fr.org/Dakar/D-T/T-D-Sakamoto.doc>)では、男女分業とサブシスタンスについて議論したが、今後、母系制社会についても研究を深めたい。

予告

博士録 00 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 1 回目には、今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程に入学する**坂本文子**(国際社会研究専攻・第 5 期生)さん、**岡本義輝**(国際社会研究専攻・第 6 期生)さん、**宮本玲子**(国際文化研究専攻・第 7 期生)さん、**方 小賢**(国際交流研究専攻・第 2 期生)さんらにお願いする予定です。

知究人 06 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(**ちきゅうびと**)を設けました。第 21 号の第 6 回目は、国際学部第 8 期生 丁研究室 0B の和田圭弘さんをお願いしました。

「研究科紹介 一橋大学大学院 言語社会研究科」

一橋大学大学院 言語社会研究科 和田圭弘

2006 年 3 月に宇都宮大学国際学部を卒業した和田圭弘と申します。指導教官は丁貴連先生でした。先生の熱心なご指導を受け、卒業後は一橋大学言語社会研究科という大学院に進学しました。今回はご縁がありまして、私が在籍する同研究科を紹介する文章を書かせていただくことになりました。

まずは言語社会研究科の基本情報から…と考えたのですが、これはウェブサイトなどである程度分かってしまうことだし、興味のない方にとっては読んでも面白くないだろうということで、この研究科に一年のあいだ身をおいて得た雑感を綴ってみようと思います。もっとも、そんな雑感だって読んでも面白くないかもしれないのですが…。在籍しているとはいっても研究科のことを隅から隅まで知っているわけではないし、もしかしたら事実誤認すらあるかもしれません。無責任な話ですが、そのあたりを念頭において読んでいただけますと幸いです。

都心を西に離れた閑静な地、国立市の一橋大学東キャンパスに言語社会研究科はあります。1996 年に開設された研究機関で、第一部門と第二部門とに分かれています。第二部門は「日本語教育学位取得プログラム」となっていて、すべての人がそうなのは断定できませんが、主に日本語教師を目指す人たちなど（あるいはすでに日本語教師である人たちが）在籍しています。

さて、私はといいますと第一部門のほうに在籍しています。第一部門は広義の人文系研究機関です。「言語社会研究科」の名の通り、在籍している学生の研究対象を訪ねて歩けば、およそ言語に関することは何でも扱われていることが分かります。いわゆるディシプリンというものすら様々なものが共存しています。自分の関心上（現在の私の研究対象は「在日朝鮮人文学」です）、私の周りには各国の文学・哲学を研究しテキスト・クリティークに専念する人が多い傾向にありますが、そうかと思えば、社会言語学という研究領域に身を

おきそれぞれの研究対象の地へとフィールド・ワークに出かける人たちがいます。さらには、言語に留まらず、映画・演劇・音楽・その他文化研究をする人たちが結構多くいます。実に多様です。今までの自分にまったくなかった知見との接触があり、非常に大きな影響を与えてくれます。どことなく国際学部に似ていますね。私はそういう雰囲気のところ縁があるのかな、と思ったりします。

ところで、そのような多様性や学際性をもたらす弱点もあるように感じます。言語社会研究科は、仏文科や独文科、あるいは社会学科などのように、ある一つのディシプリンやある一つの専門言語によって枠付けられた研究科ではありません。そのようなまとまりは各学生が一つ以上所属するゼミにおいてそれなりに確保されることとなりますが、自分の研究領域の基礎知識を時には自分一人で固めていかなければなりません。自分の研究は自分でやる、これは当然のことです。しかしそれとは少し別のレベルで、例えば私の場合、制度として文学研究の専門教育を行なっている機関にいるのではないというのは、結構大変なことです。一般的な教養を超えた研究においては、自分がいる領域の知識がしっかり備わってこそ、学際性にも意味が出てくるはずですが。わがままな悩みと言われればそれまでですが。

言語社会研究科は人文諸科学の境界が疑われ曖昧になってきた時代の申し子だと思うのですが、そのことがかえって自分の位置を強く意識させます。足元はいつでも不安定で、「自分は何の研究者であるのか？」という問いは常に抱えています。願わくはそれをよい方向に影響させ、自己への反省的な態度を失わない研究者となりたいところです。言語社会研究科はまだ若いところですが。一緒に成長していけたらと思います。以上がこの研究科で日々の生活を送る私の由無し言です。あくまでも私のバイアスがかかった文章であることをご承知ください。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。 2007年の卯月を迎えて、皆様慌しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。) 今回予定していた執筆者から入稿がありませんでしたので、初めての休載とさせていただきます。

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い**：
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net
